

ラグビーワールドカップに学ぶ^{まな}

こうちよう ながの ひで き
校長 長野 秀樹

ラグビーワールドカップ日本大会が閉幕しました。私は、初の8強入りという目標を達成した日本チームの、タックルで倒されながらもボールをつなぐ「オフロードパス」や、低く力強いスクラムなどが象徴するチーム一丸となった献身的な戦いぶりに、大きな感動と勇気ももらいました。



ラグビーは、ボールを奪い合う中で、激しく体をぶつけ合ったり、時には相手を投げ飛ばしたりするなど、そのプレーの激しさが競技の魅力の一つです。その一方で、選手にはルールをきちんと守ることと、誇りをもって正々堂々と対戦することが求められます。その競技精神を表す有名な二つの言葉があります。

一つ目は「One for All, All for One」～一人はみんなのために、みんなは一人のために～というチームワークを大切にする考え方です。様々な役割を受け持つ15人の選手が勝利を目指し、チームが一つになって激しく戦います。二つ目は「ノーサイド」です。試合中は全力を出して激しく戦いますが、試合が終了すると、「勝った側（サイド）も負けた側もない」とお互いの健闘を讃えあうラグビーの精神を表しています。

ところで、今回のワールドカップに選出された日本代表選手は31人。その中で、およそ半分の15人が外国出身の選手でした。日本、韓国、ニュージーランド、トンガ、南アフリカなど7カ国の多様な背景を持っています。キャプテンのリーチ・マイケル選手は、15歳でニュージーランドから来日し、日本国籍を取りました。リーチ・マイケル選手は、会見の中で「日本代表は非常に多様性のあるチーム。お互いに影響し合って、日本ラグビーは毎年よくなっている。」と話していました。

最近、「多様性」という言葉を耳にします。今回のラグビーワールドカップを通して、改めて人の多様性について考える機会だったように思います。日本チームは、人種、国籍、文化、考え方などが違う多様な人々がお互いの「違い」を認め合い、尊重することで、「同じ」目的、目標を持つ強いチームとなりました。

知名小の子供たちにも、学校や学級のために、一人一人が自分の役割をきちんと果たすとともに、自分と違う他者を認め、尊重し、互いに高め合える人になって欲しいと願っています。